日蓮正宗

教学小辞典

創価学会教学部編

創 価 学 会

〈要語解説五十音索引〉

あ

阿育大王……三六五
熱原法難……三六一
阿仏房……三九〇
阿羅漢……三六
安楽行品……六七

い

池上兄弟……三八四
池上と中山……三九六
以信代慧……三三一
イスラム教……四二八
異体同心……三二五
一大事因縁……九一
一念三千……一七九
一品二半……一五七
因果俱時……一九五

う

有徳王と覚徳比丘……三二四

え

依義判文……二一〇
演繹法と帰納法……四三三

お

小樽問答……四一七
御義口伝……二八〇

か

開三顕一……八八
開示悟入……八九
戒定慧……三七
戒壇建立……二三八
開目抄……二一四
科学と宗教……四四五
価値論……四四九
勧持品……六七、一〇四
観心本尊抄……二一五
観世音菩薩普門品……七五
観普賢菩薩行法経……八〇

き

機……一三六
記小久成……九四
義真和尚……三七五
九十五派のバラモン……四二〇
旧本門宗……四〇五
教……一三五
教相・観心……二六二
境智冥合……二五九
経典の結集……三四二
京都の一致派……三九七

教法流布の先後……一四〇
行満座主……三七三
キリスト教……四二六

く

空仮中の三諦……二〇
久遠名字即……二五七
国……一三八
供　養……三三九

け

化儀の四教……九
華厳宗の教義……一六
下種本因妙……二五一
化城喩品……六三
化法の四教……五
外用と内証……二〇八
現　証……一四九
還著於本人……三〇一
見宝塔品……六五
顕本法華宗……四〇一
顕益・冥益……三〇九

こ

劫……四九
広開近顕遠……九六
孝道教団……四一二
五逆罪……四三
五五百歳広宣流布……一七五
五　濁……二
五重玄……一九九
五重三段……一五一
五十展転……三〇七
五十二位……一一九
五重の相対……一四〇
五種の妙行……一二四
五　濁……四六
国家諫暁……三五〇
五百弟子受記品……六三
今此三界……一一
権実相対……一四二

さ

三因仏性……二〇〇
三　界……三一
三箇の勅宣……一〇一
三災七難……四四
三時の弘教……一六八
三十二相……三五
三周の声聞……九〇
三重秘伝……一四九
三種の教相……二一
三種の法華経……八六
三　証……一四七
三障四魔……二九七
三　身……一九二
三世間……一一〇
三千塵点劫と五百塵点劫……九三
三大秘法……二三
三変土田……九二

三　宝……一九六
三方便……二〇五
三類の強敵……二九五
三　惑……一九

し

自我偈……一〇九
色心不二……二五〇
直達正観……二八三
自行化他……三一八
四句の要法……一三九
四箇の格言……一〇
四悉檀……二〇四
四　衆……一一四
四重興廃……一五〇
自受用身の勝劣……二七四
四条金吾頼基……三八二
四　諦……二九
七　譬……八七
十界互具……一八二
実存哲学……四三九
示同凡夫……二七三
事と理……一八一
舎衛の三億……一七八
釈迦仏像を本尊としない理由　二四四
釈尊の一生……三三六
釈尊の九横の大難……五三
迹門と本門……八四
従因至果・従果向因……一三八
宗教の五綱……一三四
十四誹謗……二九九
従地涌出品……六八
十大部……二一六
十二因縁……二九
十如是……一八四
十羅刹女……五一
授学無学人記品……六四
授記品……六二
儒　教……四二
宿縁深厚……二八五
主師親の三徳……二五四
受持即観心……二六三
種熟脱……一九七
種脱相対……一四三
地涌の菩薩……一六三
寿量品の三妙合論……一六六
順縁・逆縁……二九四
章安大師……三七一
生死一大事血脈……二六九
摂受・折伏……二九二
浄蔵・浄眼……一一三
浄土宗の教義……一一
常不軽菩薩品……七二
正法一千年間の弘教……一六九
声聞の十大弟子……五二
常楽我浄……二六七
初住位の本因と久遠元初の本因……二七六
諸天の加護……三三六
序品……五七

信解品……六一
真言宗の教義……一三

す

随縁真如の智……二七七
随喜功徳品……七一
垂迹と再誕……二八八
随方毘尼……三三
砂村問答……四一四

せ

性善説と性悪説……四三五
世法と仏法……三三四
前三・後三……二一
禅宗の教義……三
染浄の二法……二七一
善知識・悪知識……三三

そ

相待妙・絶待妙……二〇六
総別の二義……二六八
像法一千年間の弘教……一六九
草木成仏……二八六
即身成仏……二五三
嘱累品……七三

た

大綱と網目……二一九
大御本尊への疑難を破す……三三一
大小相対……一四一
大通智勝仏……一〇一
体内・体外……二〇七
提婆達多……三六四
提婆達多品……六六
多宝の塔……一〇六
陀羅尼品……七六

ち

中国への仏教伝来……三四四

て

伝教大師……三七四
霑志問答……四一六
転重軽受……三〇六
天台宗の教義……一七
天台大師……三七〇

と

動執生疑……一五九
道邃和尚……三七三
当体蓮華……二四七
時……一三七
富木常忍……三八七

な

内外相対……一四一
南岳大師……三七一
南条時光……三八五

に

二箇相承……三五七

日有上人……三七七
日寛上人……三七七
日目上人……三七五
日蓮宗一致派……三九一
日蓮宗不受不施派、同講門派……三九七
日蓮大聖人のご一生……三四八
日興上人……三五二
日本への仏教伝来……三四六
如是我聞……八三
如説修行……三一七
女人成仏……三三二
如来寿量品……六九
如来神力品……七三
如来秘密神通之力……二七三
人法一箇……二四六

は

八　教……五
八相作仏……三四
原殿御書……三六〇

ひ

譬喩品……六〇
病気の原因……三〇三
ヒンズー教……四三一

ふ

不軽品の意義……一二
福　運……三〇八
福十号に過ぐ……二八三
普賢菩薩勧発品……七六
不自惜身命……三一一
付法蔵の二十四人……三三七
プラグマティズム……四四一
分別功徳品……七〇

へ

変毒為薬……三〇五

ほ

方便品……五七
方便品・寿量品を読誦する意味……三三三
謗法厳戒……三〇〇
法華経の新訳・旧訳……三四五
法華経八巻二十八品……五六
法華宗……四〇三
法師功徳品……七二
法師品……六四
発迹顕本……九七
本因の境智行位……二七五
本化付嘱と迹化付嘱……一二五
本迹相対……一四二
煩悩即菩提……二六六
本仏論の遮難……二七八
本門戒壇の大御本尊……三三五
本門八品の意味……一〇三
本門法華宗および仏立宗等……三九七

要語解説

目次

第一編　仏教一般

五時……二
八教……五
四箇の格言……一〇
浄土宗の教義……一一
禅宗の教義……一二
真言宗の教義……一三
律宗の教義……一五
華厳宗の教義……一六
天台宗の教義……一七
三惑……一九
空仮中の三諦……二〇
四諦……二九
十二因縁……二九
六波羅蜜……三一
三界……三一
八相作仏……三四
三十二相……三五
阿羅漢……三六
戒定慧……三七
五逆罪……四三
三災七難……四四
五濁……四六
劣応身・勝応身……四八
劫……四九
十羅刹女……五一
声聞の十大弟子……五二
釈尊の九横の大難……五三

第二編　法華経に関するもの

法華経八巻二十八品……五六
如是我聞……八三
迹門と本門……八四
三種の法華経……八六
七譬……八七
開三顕一……八八
開示悟入……八九
三周の声聞……九〇
一大事因縁……九一
三変土田……九二
三千塵点劫と五百塵点劫……九三
記小久成……九四
略開近顕遠……九五
広開近顕遠……九六
発迹顕本……九七
六難九易……九八
竜女・提婆……九九
大通智勝仏……一〇一
三箇の勅宣……一〇一
本門八品の意味……一〇三
勧持品……一〇四
多宝の塔……一〇六
霊鷲山……一〇八
自我偈……一〇九
三世間……一一〇
今此三界……一一一
不軽品の意義……一一三
浄蔵・浄眼……一一三
四衆……一一四
本化付嘱と迹化付嘱……一一五

摩訶止観……一一七
六即……一一八
五十二位……一一九
三種の教相……一二一
五種の妙行……一二四
従因至果・従果向因……一二八
四句の要法……一二九

第三編　日蓮大聖人の教義

宗教の五綱……一三四
五重の相対……一四〇
三証……一四七
三重秘伝……一四九
四重興廃……一五〇
五重三段……一五一
文底秘沈……一五三
文底下種三段……一五四
流通分……一五五
一品二半……一五七
地涌の菩薩……一六三
寿量品の三妙合論……一六六
三時の弘教……一六八
五五百歳広宣流布……一七五
舎衛の三億……一七八
一念三千……一七九
事と理……一八一
十界互具……一八二
十如是……一八四
三身……一九二
因果俱時……一九五
三宝……一九六
種熟脱……一九七

五重玄……一九九
三因仏性……二〇〇
四悉檀……二〇四
三方便……二〇五
相待妙・絶待妙……二〇六
体内・体外……二〇七
外用と内証……二〇八
依義判文……二一〇
前三・後三……二一一
立正安国論……二一三
開目抄……二一四
観心本尊抄……二一五
十大部……二一六
大綱と網目……二一九

第四編　三大秘法

三大秘法……二二二
本門戒壇の大御本尊……二二五
戒壇建立……二二八
末法の御本仏……二四一
人法一箇……二四六
当体蓮華……二四七
色心不二……二五〇
下種本因妙……二五一
即身成仏……二五三
主師親の三徳……二五四
久遠名字即……二五七
境智冥合……二五九
末法の観心……二六〇
教相・観心……二六二
受持即観心……二六三
煩悩即菩提……二六六

常楽我浄……二六七
総別の二義……二六八
生死一大事血脈……二六九
染浄の二法……二七一
示同凡夫……二七三
如来秘密神通之力……二七三
自受用身の勝劣……二七四
本因の境智行位……二七五
初住位の本因と久遠元初の本因……二七六
随縁真如の智……二七七
本仏論の遮難……二七八
御義口伝……二八〇
我が身即妙法蓮華経……二八二
直達正観……二八三
福十号に過ぐ……二八三
宿縁深厚……二八五
草木成仏……二八六
垂迹と再誕……二八八

第五編　信心修行

摂受・折伏……二九二
順縁・逆縁……二九四
三類の強敵……二九五
三障四魔……二九七
十四誹謗……二九九
謗法厳戒……三〇〇
還著於本人……三〇一
病気の原因……三〇三
変毒為薬……三〇五
転重軽受……三〇六
五十展転……三〇七
福運……三〇八

顕益・冥益……三〇九
不自惜身命……三一一
有徳王と覚徳比丘……三一四
異体同心……三一五
如説修行……三一七
自行化他……三一八
聞法下種と発心下種……三一九
以信代慧……三二一
随方毘尼……三二二
善知識・悪知識……三二三
世法と仏法……三二四
勇猛精進……三二五
諸天の加護……三二六
魔の通力……三二七
供養……三二九
臨終の相……三三一
女人成仏……三三三
方便品・寿量品を読誦する意味……三三三

第六編　仏教史

釈尊の一生……三三六
付法蔵の二十四人……三三七
経典の結集……三四三
中国への仏教伝来……三四四
法華経の新訳・旧訳……三四五
日本への仏教伝来……三四六
日蓮大聖人のご一生……三四八
国家諫暁……三五〇
日興上人……三五二
六老僧……三五五
二箇相承……三五七
身延離山……三五八

原殿御書……三六〇
熱原法難……三六一
提婆達多……三六四
阿育大王……三六五
竜樹・天親……三六七
天台大師……三七〇
妙楽大師……三七三
伝教大師……三七四
日目上人……三七五
日有上人……三七七
日寛上人……三七七
六巻抄……三七八
四条金吾頼基……三八二
池上兄弟……三八四
南条時光……三八五
富木常忍……三八七
阿仏房……三九〇
日蓮宗一致派……三九一
本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等……三九七
顕本法華宗……四〇一
法華宗……四〇三
旧本門宗……四〇五
立正佼成会……四〇七
孝道教団……四一三
砂村問答……四一四
霑志問答……四一六
小樽問答……四一七

第七編　古今の思想哲学の説明と批判

九十五派のバラモン……四二〇
儒教……四三

ユダヤ教……四二四
キリスト教……四二六
イスラム教……四二八
ヒンズー教……四三一
演繹法と帰納法……四三三
性善説と性悪説……四三五
唯物論と唯心論……四三七
実存哲学……四三九
プラグマティズム（実用主義）……四四一
唯物弁証法……四四三
科学と宗教……四四五
価値論……四四九

第一編　仏教一般

【五時】

釈迦が一代五十年の間に説いた教えを、天台大師は分類解釈して五時八教とした。五時とは、釈迦の教説を、説法の順序にしたがって、華厳時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時の五つに分類したものである。

釈迦が三十で成道してから二十一日間、伽耶城の近くの菩提樹の下で華厳経を説いたのを華厳時という。その後、波羅奈国の鹿野苑などで十二年間にわたって阿含経などの小乗の教えを説いて仏法に誘引したのを阿含時という。次の十六年間、欲界と色界の中間、大宝坊で維摩経、観経、大日経、阿弥陀経、金光明経などを説き、小乗の教えを弾訶して大乗教を慕わせたのを方等時という。その後の十四年間に鷲峯山、白露池などで摩訶般若など皆空の教えを説いて衆生の機根を陶汰したのを般若時という。こうして、釈迦は四十二年の間さまざまな教えを説いて衆生の機根が調った後、中天竺摩訶陀国の霊鷲山と虚空会の二処三会で八年間に法華経を説き、方便・権教を捨てて一切衆生が成仏できる真実の教えを顕わし、二乗作仏の記別を授けたのを法華時といい、さらに、入滅の直前、一日一夜涅槃経を説いて、重ねて仏性を談じたのを涅槃時というが、ふつう法華涅槃時とする。

五時の説法を図示すれば次のとおりである。

（場所　伽耶城の近くの菩提樹下、七処八会）

派

華厳時

期間　二十一日間

経　大方広仏華厳経

位　法華経に次ぐ大乗経、乳味と名づく

別・円二教を説く、兼と名づく

頓教、擬宜の教

これを依経とした宗　華厳宗

阿含時

場所　波羅奈国の鹿野苑

期間　十二年間

経　増一阿含、長阿含、中阿含、雑阿含の四経

位　小乗経、酪味と名づく

蔵教のみを説く、但と名づく

漸教（秘密、不定教もあり）

誘引の教

場所　欲界色界の二界の中間　大宝坊

期間　十六年間（一説には八年間）

経　勝鬘経、解深密経、楞伽経、首楞厳経、観経、雙観経、阿弥陀経、

これを依経とした宗派　倶舎宗　成実宗　律宗

方等時

位

大日経、金光明経、蘇悉地経、金剛頂経、維摩経等

権大乗経、生蘇味と名づく

蔵通別円の四教を対比して説く、対と名づく

漸教（秘密、不定教もあり）

弾訶の教

これを依経とした宗派

法相宗
浄土宗
真宗
禅宗
真言宗

般若時

場所

鷲峯山、白露池等四処十六会

期間

十四年間（一説には二十二年間）

経

摩訶般若、光讃般若、金剛般若等

位

権大乗経、熟蘇味と名づく

円教に通別を帯ばしめて説く、帯と名づく

漸教（秘密、不定教もあり）

陶汰の教

これを依経とした宗派

三論宗

場所

中天竺摩訶陀国の霊鷲山、虚空会、二処三会

期間

八年間

た宗派

法華経	法華経二十八品、涅槃経
涅槃時	実大乗経、醍醐味と名づく
位	円教
	頓教（秘密、不定なし）
	開会の教

これを依経とし　天台宗

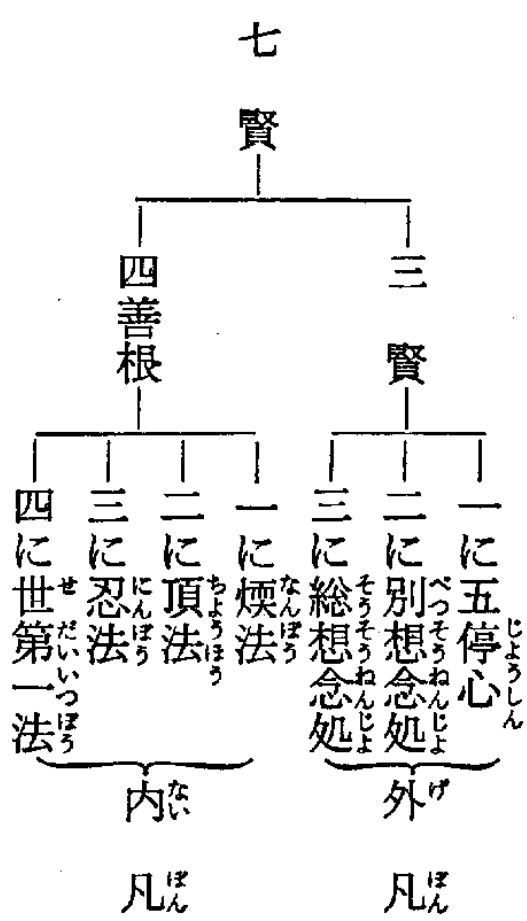
しかし、この説時については異説もある。日蓮大聖人は、守護国家論において、この点を詳しく解明されたのち「大部の経大概是くの如し此より已外諸の大小乗経は次第不定なり、或は阿含経より已後に華厳経を説き法華経より已後に方等般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし」（四〇ページ）と仰せになっており、釈迦が対告衆の機根に応じて、種々前後して法を説いたことがわかるのである。なお五味については説法の次第にしたがって右の表のように配当する場合と、教説の高低にしたがって、阿含を乳味に配し、以下方等を酪味、般若を生蘇味、華厳を熟蘇味とする場合とがある（曾谷殿御返事一〇五九ページ）。いずれの場合にも、法華涅槃時を醍醐味とすることには変わりはない。

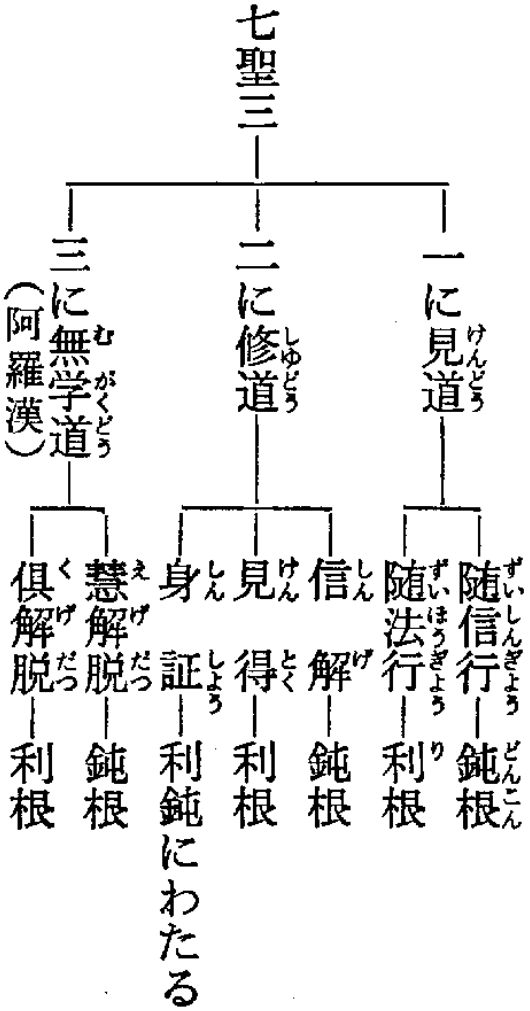
【八教】

八教とは教えの内容から釈迦一代の教説を分類、解釈したもので、化法の四教と化儀の四教である。

化法の四教　化法の四教とは、教説の内容から分類したもので、一には三蔵教・二には通教・三には別教、四には円教である。（一代聖教大意三九〇ページ）

三蔵教とは阿含経の意であり、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道内の因果の道理を明かしている。三蔵とは、一には経蔵（または定蔵）・二には律蔵（または戒蔵）・三には論蔵（または慧蔵）である。戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の戒律を説いている。定蔵とは味禅・定禅・無漏禅である。慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧である。このように三蔵経には戒・定・慧を説いているけれども、その本体は戒律である。またこの教の意は、依報には六界・正報には十界を明かし、依報にしたがってこの経を名づければ「六界を明かす経」と名づけ、また、正報にしたがってこの経を名づければ声聞経ともいう。それは正報には十界を明かしているが、縁覚・菩薩・仏といってもその内容は声聞の悟りにとどまるにすぎないから、こう呼ばれるのである。声聞について七賢・七聖の位があり、六道を凡夫としている。





（詳細の説明は一代聖教大意三九二ページ）

次に通教とは大乗の初めである。一応は戒定慧の三学を説いているけれども大旨は六道を出ない。教えの内

容が蔵教にも通じ、後の別教にも通ずるので通教という。蔵教の空観が、一切の諸法を生滅無常なりとする折空観なのに比べて、通教では無生滅の四諦・十二因縁・六度を観じて、体空の真諦をみるという。しかし蔵通二教ともに六道の凡夫に仏性があるとはいわず、この教えを修行すれば声聞・縁覚・菩薩・仏と思い思いに成道すると説いている。（一代聖教大意三九三ページ・三九四ページ）また通教では十地を説いている。

一、乾慧地　六、離欲地
二、性地　七、已弁地
三、八人地　八、辟支仏地
四、見地　九、菩薩地
五、薄地　十、仏地

次に別教とは、前の蔵通二教とも、後の円教とも別なので別教という。この教えは戒定慧の三学を述べ、声聞・縁覚を除きただ菩薩だけを対象として歴劫修行を説いているため界外独菩薩の法ともいう。この教によって三惑を断ずるとしているが、見思の惑は界内の通惑であり、塵沙は仮諦、無明は中諦の惑で界外の別惑とし、これを破して仮諦と中諦の理を悟ると説く。このように三諦各別で円融しないので、その説くところを但中の理といい、次第の三観とも但中の観ともいう。この教えの位を五十二位に分けて説いている。

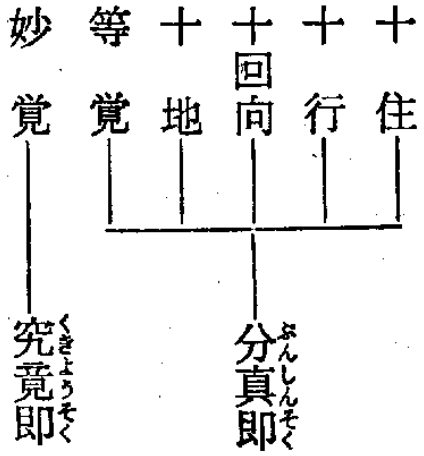
十信（見思惑を伏す）――外凡
十住（見思惑を断じ塵沙惑を伏す）
十行（塵沙惑を断ず）――内凡

十回向（無明惑を伏す）
十地（十品の無明を断ず）
等覚（同じく十一品を断ず）
妙覚（同じく十二品を断ず）
聖
（一代聖教大意三九四ページ・三九五ページ）

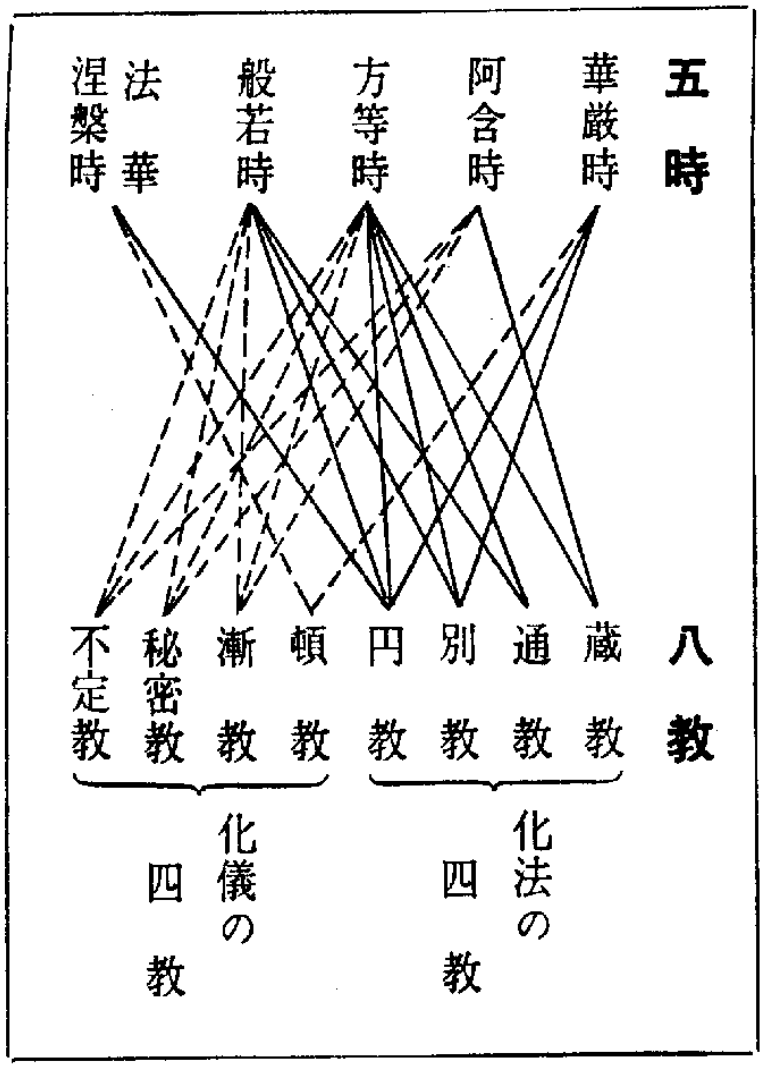
この教えの意は、五十二位の一々の位に多倶低劫を経てようやく仏に成ると説き、一人として一生のあいだに成仏する者はない。また一つの位の修行だけで仏になる者はなく、それぞれの位であらゆる修行を積んで成仏すると説く。

次に円教とは、三諦・十界・十如・三千の諸法が円融円満なるに名づける。円教に二つあり、爾前の円と法華の円である。爾前の経においても凡夫が位の次第を経ずに成仏すると説き、あるいは煩悩を断じないでも成仏すると説いている教えがある（一代聖教大意三九六ページ）。法華の円については三諦・十界互具・一念三千等、別項で詳しく解説する。なお、この教の位を六即位に配立して、

理即
五品弟子凡外凡
名字即
観行即
十信凡内凡
相似即



等とするが、日蓮大聖人の仏法における六即の配立は御義口伝下（七五二ページ）に示されているとおりである。



化儀の四教

化儀の四教とは頓・漸・秘密・不定であり、化法の四教をもって衆生の機根を調熟していく教化の方法で釈迦の教説を分類したもの。すなわち、誘引の手段をとらず、率直に大乗を説くのが頓教であり、小を説いてしだいしだいに誘引するのを漸教といい、同じ説法を聞いておのおの別々に会得させるのを秘密教といい、得益の不同を不定教という。

法華経は、この八経中いずれに属するかについて、天台、妙楽は「超八」と解釈し、八教に超越している

と説いている。また日蓮大聖人は次のように仰せになっている。

曾谷入道殿御返事（一〇五七ページ）　妙楽大師の記に云く「若し超八の如是に非ずんば安んぞ此の経の所聞と為さん」云云、彼彼の諸経の題目は八教の内なり網目の如し、此の経の題目は八教の網目に超えて大綱と申す物なり。

御講聞書（八一一ページ）　此の経の如是は爾前の諸経の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは速疾頓成の故なり。

五時と八教との関係を図示すれば、前頁のようになる。

【四箇の格言】

日蓮大聖人は宗旨建立の初めにあたって、それまでの一切の仏法は時機不相応であるとして次のように破折された。これを四箇の格言といっている。

秋元御書（一〇七三ページ）　而るを日蓮一人・阿弥陀仏は無間の業・禅宗は天魔の所為・真言は亡国の悪法・律宗・持斎等は国賊なりと申す云云。

御義口伝上（七一三ページ）　今日蓮等の類いは無問自説なり念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無問自説なり。

諫暁八幡抄（五八五ページ）　我が弟子等が愚案にをもわく我が師は法華経を弘通し給うとてひろまらざる上

大難の来れるは真言は国をほろぼす念仏は無間地獄・禅は天魔の所為・律僧は国賊との給うゆへなり、例せば道理有る問注に悪口のまじわれるがごとし云云。

この四箇の格言によって、日蓮大聖人御在世当時盛んだった念仏、禅、真言、律の各宗の教義の誤りは、短いお言葉で完璧に破折しつくされているのである。（各宗の教義の項参照）

日蓮大聖人出世の本懐は三大秘法の建立にあらせられることはいうまでもないが、その建立に先立って四箇の格言を説かれたのは、破邪なくして立正はないからである。

【浄土宗の教義】

（**発生**）中国では曇鸞（西紀四七六～五四二年）が天竺の菩提留支三蔵に会って「観無量寿経」を受け、阿弥陀の力によって浄土往生ができると説いて浄土の教えを弘め、その後、道綽（西紀五六二～六四五年）善導（西紀六一三～六八一年）などに受け継がれた。わが国の元祖は法然（西紀一一三三～一二一二年）。

（**教義**）無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経を浄土の三部経として、この世の中は穢土であり、死んだ後に西方の極楽浄土へ往生するのを理想とし根本としている。そのために釈尊一代の仏教を聖道門・浄土門の二つに分け、浄土宗以外の一切の経教を修行するのは難行道であり、浄土門は易行道であると立てる。そして聖道門においては「いまだ一人も得道した者がない」とか「千人の中に一人も成仏する者はない」として、このような雑修・雑行を捨て「百人が百人とも往生のできる」念仏宗に帰依せよと主張している。（立正安国論二二ページ等）

法然は、選択集において、捨閉閣抛すなわち浄土三部経以外の教えを一切、雑修・雑行として、捨てよ閉じよ閣け抛てといって、正法たる法華経を誹謗している。本尊には阿弥陀の一仏のみを立てる。

（破折）浄土の三部経は方等部であり、四十余年の説で権教方便の教えである。後八年の法華経こそ実教であり、釈尊の出世の本懐であることは、無量義経に「四十余年未顕真実」とあり、また法華経方便品に「正直に方便を捨てて但無上道を説く」とあることで明らかである。しかるに念仏宗の開祖たちは捨閉閣抛といって三部経以外の教えを一切、雑修・雑行として正法たる法華経を誹謗している。これは阿弥陀如来の前身である法蔵比丘が立てた四十八願のうちの第十八願の「いかなる罪人・悪人でも阿弥陀を念ずれば西方十万億土の極楽浄土へ往生することができる。ただし五逆罪と誹謗正法の者をば除く」（頼基陳状一一五四ページ）という誓文に背くから、現在の念仏宗で往生のできるわけがない。まして法華経譬喩品第三には「この経を毀謗する者は無間地獄に堕つ」と説かれているから「念仏は無間地獄の法なり」と決定されるのである。

【禅宗の教義】

（発生）霊山会上で釈尊が、黙然として花を拈って大衆に示した時、すべてその暗示的意味を理解することができなかったなかに、迦葉だけがその意味を悟って破顔微笑した。そして大梵天王問仏決疑経（これは偽経である）にある「正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門があり、文字を立てず教外に別伝して迦葉に付嘱する」との経文どおり承伝して第二祖阿難、第三祖商那和修と代々相伝付嘱して第二十八祖の達磨にいたり、

それ以来、中国から日本へと弘通されてきた、と禅宗ではいう（蓮盛抄一五〇ページ）。わが国においては栄西（西紀一一四一～一二一五年・臨済宗）、道元（西紀一二〇〇～一二五三年・曹洞宗）、隠元（西紀一五九二～一六七三年・黄檗宗）が派祖。

（教義）禅宗は、戒・定・慧の三学のうちで、特に定の部面を強調している。すなわち、仏教の真髄は決して煩雑なる教理の追究ではなくて、坐禅修道することによって直接に自証体得することができると説き、そのために、不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏が教えの根本として掲げられている。

（破折）禅宗のように経文は月をさす指であり、禅は「見性成仏」である等と説くのは、経文を否定し、凡夫である自己を過信した仏法を破壊する業である。ゆえに仏は涅槃経に「願って心の師と作って心を師とせざれ」と説き、また「仏の所説に順わざる者有らば当に知るべし是れ魔の眷属なり」と説いている。そのため日蓮大聖人は「禅は天魔の所為」と破折されるのである。また不立文字を立てながら楞伽経を引き、あるいは偽経である像法決疑経を引くのは自語相違であり、まして、楞伽経は四十余年の権教であり「未顕真実」と破られている経である。

【真言宗の教義】

（発生）その流派によって東密（東寺流）・台密（天台派）に分かれている。大日如来が色究竟天法界宮において大日経を説き金剛頂経を説いた。金剛薩埵がそれらを結集して南天の鉄塔においた。釈尊滅後七百年ごろ、

竜樹菩薩がその鉄塔の扉を開き、両経を金剛薩埵より授かり、これを竜智菩薩に伝え、竜智はさらに「大日経」等を善無畏（西紀六三七～七三五年）に、「金剛頂経」等を金剛智（西紀六七〇～七四一年）に授けたと説いている。後に、その法は不空（西紀七〇五～七七四年）、慧果（西紀七四五～八〇五年）と伝承された。この間インド、中国においては、まだ真言宗という名はなかった。わが国の空海（弘法大師・西紀七七四～八三五年）は最澄（伝教大師）と共に渡唐し、慧果より金剛、胎蔵両部の秘奥を伝授され、帰朝後、真言宗の立宗を宣言した。

（教義）その主張は、法華経等の一切経は応身の釈迦仏が説法したものであり、大日経は法身大日如来の説法である。大日如来に比較するならば釈尊は無明の辺域すなわち迷いの凡夫のようなものであり、ゾウリ取りにもおよばない。また法華経は釈尊一代の仏経中でも第三の劣であり、戯論である。（真言天台勝劣事一三四ページ等）また一念三千は大日経の法門であり、法華経にもこれが説かれているから「理は同じ」であるが、大日経には印と真言とが詳しく説かれているので「事においてすぐれている」等々と説いている。本尊として大日如来・薬師如来をおき、脇士に金剛薩埵・不動明王・虚空蔵菩薩等の仏・菩薩を配置している。

（破折）依経の大日経等は、権教四十余年の説であることは前節のとおりである。真言宗の最も悪法である理由は、一代の教主たる釈尊の悪口をいい、卑下して、法身仏たる大日如来を立てることにある。一身即三身と現われる仏こそ、われわれ衆生に智慧と慈悲をもって接することができるのであり、法身の理は、われわれの生活とは直接になんの関係もない。大日法身といえども釈尊の説法であり、しかも四十余年の権教である（真言天台勝劣事一三六ページ）。それのみか中国では天台の一念三千の法をひそかに取り入れて自宗の極理とし、日

本の弘法にいたっては、さらに口をきわめて法華天台を罵倒している。

このように本来の主人をさしおいて無縁の主を立てるところから、真言は亡国・亡家・亡人の法であるとされるのである。

【律宗の教義】

（発生）開祖は中国の道宣（西紀五九六～六六七年）。わが国では聖武天皇の天平勝宝六年（西紀七五四年）に来朝した鑑真が、東大寺に戒壇を建て、聖武天皇はじめ四百余人に戒を授けたことから始まる。後に唐招提寺を建立して根本道場と定めた。

鎌倉時代に極楽寺を建てた忍性良観（西紀一二一七～一三〇三年）が出現して日蓮大聖人に敵対しながらも、幕府の権力者の帰依をうけて隆盛をきわめたが、以後、代々衰え、現在では唐招提寺を総本山として、わずかにその余命を保っているにすぎない。

（教義）四分律すなわち戒律を根本とし、小乗経を依経とする。四分律とは内容的分類ではなく、釈尊滅後百年ごろ、曇無徳尊者が四度にわたって、戒律について編纂したもので、その意味をあらわして四分律という。

（破折）律宗の教えは正法時代の小法であり、日本では像法の中ごろ、法華経迹門が流布する前に、しばらく衆生の機根を調養するため弘まった宗旨である。個人主義的色彩が強く、仏法の根本精神に合致しない。ゆえに伝教大師は法華経の迹門を弘めるにあたり、まず他の南都五宗と共に律宗も破折しており、日蓮大聖人も律

国賊と喝破されたのである。

なお、法華経宝塔品第十一に「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ即ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく、則ち為れ疾く、無上の仏道を得たり」

また観心本尊抄（二四六ページ）に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とあるように、末法においては、御本尊を受持することが即持戒なのであり、釈尊の爾前教に説かれているような戒律をそのまま守ることは、われわれにとって有害無益なのである。

【華厳宗の教義】

（**発生**）東晋（西紀三一七～四一九年）のころ中国に伝わり、杜順（西紀五五七～六四〇年）智儼（西紀六〇二～六六八年）を経て法蔵（西紀六四三～七一二年）にいたって大成され、澄観（西紀七三八～八三九年）らによって弘伝された。わが国へは聖武天皇の天平十二年（西紀七四〇年）に新羅の僧・審祥（西紀？～七四二年）が良弁（西紀六八九～七七三年）に伝え、一時は南都仏教の中心勢力となった。奈良の東大寺がその本山である。鎌倉時代以後はまったく振るわず、現在では東大寺を中心に五十数寺院があるにすぎない。

（**教義**）華厳宗は華厳経を依経とする。本尊は盧舎那仏で、文殊と普賢の二菩薩が脇士となっている。四種の

法界を立て十玄六相を説いているが、理論偏重に陥り、事行の面がぜんぜんなおざりにされている。

聖密房御書（八九六ページ）　唐の代に高宗の后・則天皇后と申す人の御時・法蔵法師・澄観なんど申す人・華厳宗の名を立てたり、此の宗は教相に五教を立て観門には十玄・六相なんど申す法門なり。

（破折）華厳経は化法のうえからみれば別教のなかに円教を加味したもので、化儀のうえからみれば頓教で権大乗に属する教えである。したがって二乗作仏も定まらず、空仮中の三諦もばらばらで融通せず、理論的にも完璧とはいえない。ところが法蔵・澄観はひそかに法華経の一念三千の法門を自宗に取り入れ、華厳経第一、法華経第二、涅槃経第三と立て、仏の真意を隠蔽したが、結局、華厳経のなかには一念三千の法門は説いていないので、かえって教義の貧しさを露顕する結果となった。

観心本尊抄（二四六ページ）　華厳経・大日経等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん。

開目抄上（一九〇ページ）　華厳宗は澄観が時・華厳経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偸み入れたり、人これをしらず。

【天台宗の教義】

（発生）天台大師（西紀五三八～五九七年）は中国の陳朝の天嘉元年、二十三歳の時、光州の大蘇山で慧思（南岳大師）に師事し、四安楽行を授けられ法華三昧を行じた。大建七年、三十八歳の時、天台山にはいり修

行すること十数年、国王の詔によって金陵（南京）へ帰り、「大智度論」「仁王経」を講義した。その後五十歳の時「法華文句」、五十六歳で「法華玄義」、翌年「摩訶止観」を述べて天台の三大部を完成させ、その間、南三北七の誤った教義を破折した。

天台の正法は第四祖章安大師（西紀五六一～六三二年）によって伝承され、中興の祖と仰がれた第九祖妙楽（西紀七一一～七八二年）により、大いに興隆した。

わが国の伝教大師（西紀七六七～八二二年）は延暦二十三年に唐へ渡り、妙楽の弟子・行満座主および道邃和尚によって天台の教えを伝授付嘱され、帰国後、比叡山に一乗止観院（いまの根本中堂）を建立し、宮中において南都六宗と法論を行ない、三乗を破して法華一乗の義を顕揚した。次いで義真（西紀七八一～八三三年）は、勅命によって迹門の円頓戒壇を叡山に建立した。

（**教義**）法華経を正依の経とし、涅槃経、華厳経をはじめ、諸大乗経に説かれている円文をもって傍依の経とする。教相・観心の二門をもって綱要とし、教相に五時八教を立て、観心には三諦円融の理を唱え、摩訶止観で説いたところの一念三千、一心三観の理を証することによって即身成仏を期す。比叡山の根本中堂の本尊は薬師如来である。

（**破折**）観心本尊得意抄（九七二ページ）　叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設い天台伝教の如く法のままありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚自り已来大小権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間・像法の時の利益も之無し増して末法に於けるをや。

右の日蓮大聖人の御金言のように、像法の衆生を救った天台・伝教大師の教えのとおり修行したところで、

いま末法では功徳がない。まして慈覚以後の比叡山は真言の誤った法をまじえて天台真言宗となってしまい、先師の教えに反したのであるから、天台宗の教えを末法において実践しても功徳がないのは当然である。

【三惑】

三惑とは見思惑、塵沙惑、無明惑のこと。開目抄上（一八八ページ）に「元品の無明の根本猶を・かたぶけ給へり況や見思枝葉の麤惑をや」と三惑の名をあげられている。釈迦仏法においては、苦しみの原因は煩悩にあるゆえに、煩悩を完全に滅すれば一切の苦悩は消滅し、ただちに成仏の境地を得ることができると説いている。この煩悩の数は八万四千あるが、性質のうえから大別すると界内見思の惑、界外化導障塵沙の惑、中道障無明の惑という三惑に分かれる。（一代聖教大意三九三ページ）

第一に見思の惑とは三界六道の苦果を招く惑であり、さらに分けて見惑と思惑とする。見惑は事物の道理に迷う惑で、また十使があり、五利使（身見・辺見・邪見・見取見・戒禁取見）と五鈍使（貪・瞋・癡・慢・疑）で、さらに三界の四諦にあてて八十八使となる。思惑は俱生惑といって、生まれると同時についてくる煩悩、欲界に貪・瞋・癡・慢、色界に貪・瞋・慢、無色界に貪・癡・慢とあてて八十一品とする。

第二に塵沙の惑とは、二乗や菩薩が修行の過程で、小果に執著し、空理に執著し、あるいは化導の障りとなる等の惑で、その数が無量のところから塵沙惑と呼び、大乗の大菩薩だけがよくこの惑を断破することがで

きる。

第三に無明惑とは中道法性を障える一切の生死煩悩の根本であり、別教には十二品・円教には四十二品を立てている。四十二のうち最後の無明惑を元品の無明といい、これを断じ尽くせば仏になれる。

以上の三惑は釈迦仏法において浅きより深きにいたる立て分けであるが、末法の今日においては根本の惑はただ一つである。すなわち三大秘法の大御本尊を信じない者が元品の無明惑であり、信じ奉るときには無量の惑がたちまち断破して、煩悩即菩提・生死即涅槃と開覚するのである。

御義口伝上（七五一ページ）　元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し。

御義口伝上（七二五ページ）　此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり。

治病大小権実違目（九九七ページ）　法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり。

右の御金言のように、われわれは信心修行の過程にあって、心していくべきは元品の無明、第六天の魔王との戦いである。

【空仮中の三諦】

三諦の諦とは、審諦すなわち「つまびらか」または「あきらか」という意味で、十分に実相を見ることであ

る。仏の悟りの真実の理をいう。仮とは一切の万法が、おのおのが仮に因縁によって和合している皮相の面のみをいう。たとえば、咲いている花の姿のみを見ればこれは仮である。いつ散ってしまうかわからない、仮和合の状態である。空とは万法の一切の性分のことで、有とも無とも固定できない。有無の二道以外の冥伏された状態、しかも一刹那をとらえれば、このどちらかに固定している不思議な実在である。花が芽ぐみ、色とりどりの花を咲かせるその性分、また大宇宙の運行等がこれである。この二面を備えて、しかも動かすことのできない厳然たる本質、これが中諦である。花が枯れても咲いても、その草木自体の本質には変わりはないのである。この三が即十如実相であり、法・報・応の三身である。図示すれば、

相――応身如来――仮諦
性――報身如来――空諦
体――法身如来――中道

さらに、日蓮大聖人の御書によって解説することとする。

一念三千法門（四一二ページ）

されば当宗には天台の所釈の如く三遍読に功徳まさる、第一に是相如と相性体力以下の十を如と云ふ如と云うは空の義なるが故に十法界・皆空諦なり是を読み観ずる時は我が身即・報身如来なり八万四千又は般若とも申す、第二に如是相・是れ我が身の色形顕れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の十なれば十法界・皆仮諦と申して仮の義なり是を読み観ずる時は我が身即・応身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み観ずる時は我が身即法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃と

も寂滅とも申す、此の三を法報応の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即三徳究竟の体にて三身即一身の本覚の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

さらに同じく一念三千法門（四一六ページ）

観念せずと雖も始に申しつるごとく所謂諸法如是相如云云と読む時は如は空の義なれば我が身の先業にうくる所の相性体力・其の具する所の八十八使の見惑・八十一品の思惑・其の空は報身如来なり、所謂諸法如是相云云とよめば是れ仮の義なれば我が此の身先業に依って受けたる相性体力云云其の具したる塵沙の惑悉く即身応身如来なり、所謂諸法如是と読む時は是れ中道の義に順じて業に依って受くる所の相性等云云、其に随いたる無明皆退いて即身法身の如来と心を開く、此の十如是・三転によまるる事・三身即一身・一身即三身の義なり三に分るれども一なり一に定まれども三なり。

以上の御文にあるように、日蓮正宗においては、修行に正行と助行があり、正行には題目、助行に方便、寿量の読誦を行なうが、方便品の十如是を三回くり返して読むことは、あくまでも、空・仮・中の三諦に読むことにより、一切を三身如来と観ずるためである。一心三観は、天台が立てたのであるが、日蓮大聖人の仏法よりいうならば、一心とは、大御本尊を信ずる一念の心であり、この信の一念に三諦を成ずることができるのである。

十如是のうちの三如是（相性体）が、三諦または三身如来であり、終わりの七如是は、三如是を本としていでて十如是となるのである。したがって十如是も、あくまでも三身如来のうえから論じられるものである。こ

のことについての日蓮大聖人の御文を次にあげてみることにする。

十如是事（四一〇ページ）

初めに如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華経をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是とは成りたるなり。

以上の関係を、いま一度わかりやすくするために表にしてみると次のようになる。

三如是	三諦	三身	三徳	三転読誦
如是相	仮諦	応身	解脱	如是相
如是性	空諦	報身	般若	是相如
如是体	中道	法身	法身	相如是

また、一念三千を三諦よりみるならば、百界は仮諦であり千如が空諦、三千世間が中道となり、一念三千と法門は多いが、所詮は、三諦であり、三身如来を説いているのである。この三身如来こそ、別していうならば

久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人である。そして弘安二年十月十二日ご建立の大御本尊こそが、一念三千の当体なのである。ゆえに、この御本尊を信じて題目を唱えることにより、三身即一の仏と成り、幸福境涯に到達することができるのである。

一念三千理事（四〇八ページ）弘の五に云く「一念の心に於て十界に約せざれば事を収むること偏からず三諦に約せざれば理を摂ること周からず十如を語らざれば因果備わらず三世間無んば依正尽きず」文。

これは、天台が理観の一念三千を説く理由であるが、末法の事の一念三千においても、一念に信心がなければ、仏界を欠いて十界を成ぜず、したがって「事を収むること偏からず」――その人生は、この宇宙の法則、妙法のリズムに合わない生活をしていくことになる。「三諦に約せざれば理を摂ること周からず」――信心なくしては、法界の理、しかもいちばん根本の妙理が一身にあらわれないから、あらゆる願望も叶わず、むなしく人生の苦海に沈んで出る時がなくなることになる。信心こそ、人生の根本であり、誤れる思想、宗教のとりことなること以上に恐ろしいことは、この世にないのである。

一念三千法門（四一三ページ）にいわく、

十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に各各十如を具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば三千なり、百界と顕れたる色相は皆総て仮の義なれば仮諦の一なり千如は総て空の義なれば空諦の一なり三千世間は総じて法身の義なれば中道の一なり、法門多しと雖も但三諦なり此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも申すなり始の三如是は本覚の如来なり、終の七如是と一体にして無二無別なれば本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性・末と申すは未顕の仏・九界の名なり究竟等と

申すは妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我等と差別無きを究竟等とも平等大慧の法華経とも申すなり、始の三如是は本覚の如来なり本覚の如来を悟り出し給へる妙覚の仏なれば我等は妙覚の父母なり仏は我等が所生の子なり。

十界に十界を具して運動しているのが人生であり、社会である。しかも、当面する人生社会は皆わが一念の業によって決まっているので、誕生から息を引き取るまで、これ以外に人生はありえない。この実相は、科学がどう発達して、宇宙旅行が始まろうとも、世の中が資本主義から社会主義化、共産化しようとも、どんな学問が、どんな学説を立てて人生を説明しようとも、永遠に変わることのない実相である。しかも、その奥、内面においては、十如の因果をそなえているのである。ゆえに仏と仏のみが究尽あそばされた実相は、衆生の迷妄とは大いに異なるといわれるのである。この悟りこそ仮諦である。

この仮の相である百界の世界を、目に見えない性分まで深く観察していけば、十如是の整然たる因果があることが明らかになる。この十如是の文こそ、略開三顕一の文であり、一念三千の法門の出処である。百界は、無軌道に起滅しているのではなく、十界のいずれにせよ、十種の生命の実相に区分してみることができる。この十種の生命観が、すなわち十如であり、妙法の法理からすれば千如の因果からはみ出すような現象は、なに一つとしてありえない。ことごとく、整然たる妙法そのものの体内の運行であり、さればこそ、法界の一切は、妙法蓮華、当体蓮華そのものであると示されるのである。ただし、真実の当体蓮華をあらわすことは信行を励む者のなかのことであり、他は、理即の位、すなわち理論上においてそうなのである。この十如・千如の因果の悟りが空諦である。

この百界千如も、一念の所有者である個人の五陰と、その統一体である衆生と、その舞台である国土と、この三世間を問題にしなかったならば、空理・空論に終わる以外にない。三世間がなければ依正は尽きないのである。それによって三千世間を成じ、その三千は即一念であり、その一念は即三千であり、すなわち、それによって完全なる法身が得られるのであるから、これが中道実相である。

ここにおいて、法界の生命の法理が、のこらず摂し尽くされるゆえに「三諦に約せざれば理を摂ること周からず」といわれるのである。

釈尊の説法は五十年、前四十二年は未顕真実の化他の教え、法華八か年は皆是真実の自行の教えである。説法の期間は長く、法門は多いが、すべては三諦を説いたにすぎない。総じてあらゆる仏の説はしめくくっていえば三諦の法門である。この本意を知らずして部分によって宗を立てるゆえに、各宗・各派は、教主の本意に背いてしまうのである。

三世諸仏総勘文教相廃立（五七三ページ）にいわく、

頓と漸と円とは三教なり是れ一代聖教の総の三諦なり頓・漸の二は四十二年の説なり円教の一は八箇年の説なり合して五十年なり此の外に法無し何に由ってか之に迷わん……総の三諦とは譬えば珠と光と宝との如し此の三徳有るに由って如意宝珠と云う故に総の三諦に譬う若し亦珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の方便教の宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え宝をば応身に譬う此の総の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり之を丸じて一と為すを総の三諦と云う、此の総の三諦は三身即一の本覚の如来なり又寂光をば鏡に譬え同居と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に譬う四土も一土なり三

身も一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを寂光の仏と云う寂光の仏を以て円教の仏と為し円教の仏を以て寤の実仏と為す余の三土の仏は夢中の権仏なり、此れは三世の諸仏の只同じ語に勘文し給える総の教相なれば人の語も入らず会釈も有らず若し之に違わば三世の諸仏に背き奉る大罪の人なり天魔外道なり永く仏法に背くが故に之を秘蔵して他人に見せざれ。

さらに同じく三世諸仏総勘文教相廃立（五七四ページ）にいわく、

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは中道なり法華なり大とは空諦なり華厳なり事とは仮諦なり阿含・方等・般若なり已上一代の総の三諦なり、之を悟り知る時仏果を成ずるが故に出世の本懐成仏の直道なり因とは一切衆生の身中に総の三諦有って常住不変なり此れを総じて因と云うなり縁とは三因仏性は有りと雖も善知識の縁に値わざれば悟らず知らず顕れず善知識の縁に値えば必ず顕るるが故に縁と云うなり、然るに今此の一と大と事と因と縁との五事和合して値い難き善知識の縁に値いて五仏性を顕さんこと何の滞りか有らんや。

以上に明らかなとおり、三世の諸仏の意図は、総の三諦を説き、衆生にこれを悟らしめんがために出世されるのである。

釈尊の化導の次第は、五時の説法中、阿含より般若までは仮諦を説き、華厳において空諦を説き、法華において中道を説き、一代説法をしめくくって、総の三諦を完成したのである。日蓮大聖人は、久遠元初の自受用報身如来として、文底下種の仏法を、一幅の大御本尊として顕わされ本末有善のわれらに賜いて、「三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し障り無く開悟す可し」（三世諸仏総勘文教相廃立五七五ページ）と申しておられるのである。

当体義抄（五一二ページ）にいわく、

所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居所居・身土・色心・倶体倶用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体・自在神力の顕わす所の功能なり敢て之を疑う可からず。

この御文について日寛上人は次のように仰せである。当体義抄文段（富要四巻三九六ページ）

三観三諦即一心に顕れの文。三諦は是れ境、三観は是れ智、故に知んぬ但法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、即本地難思の境智の妙法を即我れ等が一心に悟り顕わし、本門寿量の当体の蓮華仏と顕わるなり、是れを本覚無作の一心三観と名づくるなり、修禅寺決十八に云く、本門実証の時は無思無念にして誰れ造作すること無し故に無作と云うなり云云。

ゆえに御本尊を信ずる者は一心三観の観念観法を要せずして、信心によってただちに大御本尊の偉大なる対境のなかへはいりうるのである。

ちなみに、一心三観の法門は、南岳大師が、天台大師に伝え、天台はこれによって理の一念三千の法門を完成した。出処は前にも述べたとおり略開三の十如実相の文である。

再往これをみれば、三諦の法門は名目は台家より出ているが、実義は文底下種の大法より生じているのである。

【四諦】

諦は真実不虚の義で「仏智をもってあきらめた誤りなきもの」という意味で、それが四あるから四諦という。すなわち苦諦（世間の果報）、集諦（世間の苦果の因縁）、滅諦（出世間の悟り）、道諦（悟りを得るの道）、以上の四であるが、これを平易にいえば、この世の中は苦悩の集積であり、しかも、それを滅して涅槃の境涯にいたる道を説き示すという意味である。小乗の四諦を例にとると、苦諦は三界六道の生死、集諦は三界に生まれてくる原因たる見惑・思惑の煩悩、滅諦は前の苦集を滅した涅槃の境涯、道諦は滅諦にはいるべき修行法となる。

天台は玄義に次の四種の四諦を説いている。すなわち蔵・通・別・円のおのおのの四諦である。

生滅の四諦	蔵教	無量の四諦	別教
無生の四諦	通教	無作の四諦	円教

【十二因縁】

三界における迷いの因果を十二に分けたものである。（一念三千理事四〇六ページ）

十二因縁とは、一に無明で、過去世の無始以来もっていた煩悩。二に行で、過去世の善悪の行業。三に識

で、母の胎内にはいる五陰（色・受・想・行・識）。四に名色で、身心が胎内で発育しはじめるが、いまだ四根（眼・耳・鼻・舌）のない状態。五に六処（六入）で、六根を具足して胎内から生まれ出ようとするをいう。六に触で、幼児の間は苦楽の弁別がないまま物に触れているをいう。七に受で、六、七歳以後、苦楽等を識別して受けるをいう。八に愛で、十四、五歳以後、事物に対して、あるいは異性に対して生ずる愛欲。九に取で、成人して事物を貪り欲するをいう。十に有で、現世の因により来世の果を定めるをいう。十一に生で、来世の生を受け母の胎内にはいるをいう。十二に老死で、来世に老い死するをいう。

これを過去・現在・未来の三世に配当すると、無明と行とは過去の因、識と名色と六処と触と受とは現在の果、愛と取と有とは現在の三因なり、生と老死は未来の両果にあたる。すなわち識等の現在の五果は過去の無明と行との二因が元となり、生老死の未来の果は愛取有の現在の三因によるのである。このように、この十二の因縁が連鎖のように連なって、あるいは生まれ、あるいは死に、たえず六道の苦界を流転するのである。これがいわゆる「六道輪廻」である。

流転の十二因縁とは「無明は行に縁たり、行は識に縁たり……」等のようにして生死の苦界に流転していく姿である。

還滅の十二因縁とは「無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す……」等のように根本の無明を打ち破って煩悩を断じていく法である。

なお「私に云く中有の人には十二因縁具に之無し又天上にも具には之無く又無色界にも具には之無し」（一念三千理事四〇七ページ）と。

【六波羅蜜】

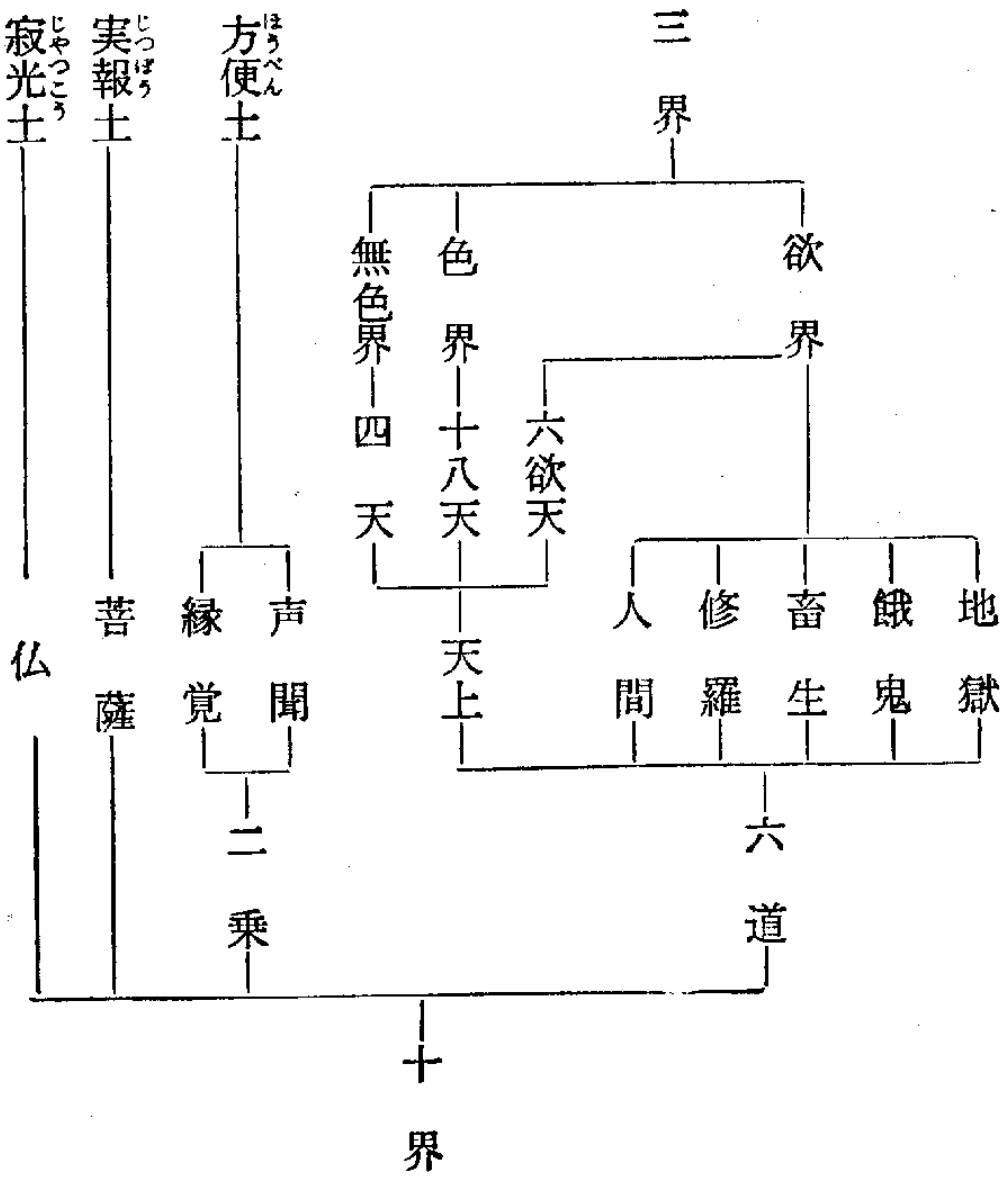
または六度ともいい「彼岸にいたる」の意。布施（檀）・持戒（尸羅）・忍辱（羼提）・精進（毘梨耶）・禅・智慧（般若）の六行であり、その行は万差であるから六度万行という。菩薩等がこの六法を修して生死の此岸よりよく涅槃の彼岸にいたる。主として通教・別教における教え。

爾前経においては菩薩の歴劫修行を説いてきたが、無量義経にいたって「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」と説いて妙法の功徳をたたえ、即身成仏を説いている。しかし末法ご出現の三大秘法の大御本尊こそ、真に「六波羅蜜自然在前」の大功徳があらせられ、われわれは、この御本尊を受持し奉るときに、一切の因果の功徳を身に体することができるのである。（観心本尊抄二四六ページ）

【三界】

悪い思想のために迷いの煩悩に禍いされて、いつまでも六道輪廻を繰り返している三種の境界（欲界、色界、無色界）のことである。

欲界とは、下は地獄界から上は天上界の六欲天までのすべてをいい、食欲、性欲などの存在する境涯、すなわち欲望の世界である。



色界とは、欲界の外の浄妙の色法、すなわち物質だけが存在する天上界の一部。

無色界というのは物質のない精神の世界で最上の天上界をさす。

欲望の世界でもそれぞれの境涯によってその住所が異なり「地獄は地の下一千由旬以下のところにあり、餓

鬼は地の下五百由旬のところ、畜生は水陸空に住し、修羅は海のほとり、海の底に住し、人は四大州に住する。また天については、四天王の住所は須弥山の中腹、由乾陀山にある。この山の四つの峰に四天王が住んでいる。東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天である。忉利天は須弥山の頂にあって三十三天に分かれ、帝釈天は喜見城にいて他の三十二天を統領している。夜摩天以上は、さらにその上にあり、空中にあるので、先の地居天に対し空居天と名づける。そして色天、無色天はさらにその上にある」と説かれている。

また六道以外の四聖の住所については、二乗は三界の外にある方便土に、菩薩は菩薩行の果報によって実報土という黄金世界に、仏は清浄な楽土たる寂光土に住するとも説かれている。

しかし日蓮大聖人は十字御書（一四九一ページ）に「抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或は地の下と申す経文もあり・或は西方等と申す経も候、しかれども委細にたづね候へば我等が五尺の身の内に候とみへて候」と仰せである。

戸田前会長は「仏界というと、仏の住む清浄な世界が、宇宙のどこかに固定しているように考えられる。また菩薩界といえば、観音菩薩や弥勒菩薩等の、絵で表現されているような生活が、宇宙のどこかにあるように考えられる。また地獄界といえば、鬼の住む世界であって、そこで悪いことをした人が、盛んにいじめられている特殊な世界があると考えられる。しかし、これらの考え方はぜんぶ誤りである。ただそういう生命を知らしめんがための譬えとして、仏典の中に表現されているが、それは権大乗以下の教典の説明法であって、決して実在するのではないのである」と述べている。しかして、三界六道も、方便土・実報土・寂光土もすべて、われわれの生命・生活のなかにあることを知るのである。

【八相作仏】

仏が応身または化身を現じて、作仏（または成道）を中心とする八種の相を示現して説法教化することをいう。八相とは下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃をいう。ただし、別教の初地、円教の初住の位以上の菩薩は部分的に八相成道を示現することがある。

下天とは詳しくは生天下天という。一たび兜率天の内院に生じ八相成道を示すべき時機の到来を待ち、いよいよ時機が熟したのを察して、人界に下り生ずることをいう。

託胎とは凡夫の入胎の時のような倒心（父母に対して愛心または瞋心を起こすことなどをいう）なく、入胎、出胎ともに過去に積み重ねた功徳によって、正しい智慧を失わずに仏母の胎に託することをいう。

出胎とは、母后の右脇より生まれ、七歩歩いて「天上天下唯我独尊三界皆苦我当度之」と述べたことをいう。

出家とは、世の無常を感じ、これを救うべく正覚を得るために出家修行することをいう。

降魔とは、仏道修行がすでに終わり、まさに無上道を成ぜんとするとき、魔王が障礙してこれを阻もうとするが、菩薩の心は金剛のように、清浄の智慧力をもって障魔を破ってこれを降伏することをいう。

成道とは、魔すでに散じて仏道を成就し、三十二相八十種好を具足した微妙法身の仏如来となること。

転法輪とは、仏の説法をいう。

入涅槃とは、化導を終わって涅槃に入り、生身の化をやめて、後に経教、あるいは舎利を留めて世を利益す

ることをいう。

大小権実等の経教の差により、八相にも多少の差異がある。しかし日蓮大聖人のお立ち場からは次のように述べられている。

上野殿後家尼御返事（一五〇六ページ）　八相も生死の二字をいでず、かくさとるを法華経の行者の即身成仏と申すなり。

【三十二相】

衆生の機根に応じて出現する仏が具えるべき三十二の特別の相。仏がこの三十二相を現わして、見る者をして愛好尊敬せしめ、それによって仏が人中の天尊であり、衆聖の主であることを知らしめるためのもので、八十種好と一緒にして仏の相好という。

ただし三十二相は総であり、八十種好は別である。三十二相も八十種好がないと円満ではない。すなわち輪王、帝釈、梵天も三十二相をそなえているが八十種好がないために微妙ではない。

いま三十二相を列挙すれば左のようになる。（多くの説があるなかの一つ）

一・足下安平立相、二・足下千輻輪相、三・手足長指相、四・足跟広平相、五・手足指縵網相、六・手足柔軟相、七・足趺高満相、八・伊泥延腨相、九・正立手摩膝相、十・陰蔵相、十一・身広長等相、十二・毛上向相、十三・一孔一毛相、十四・真妙金色相、十五・面各丈光相、十六・細薄皮相、十七・七処隆満相、十八・

両腋下隆満相、十九・上身如師子相、二十・大直身相、二十一・肩円好相、二十二・四十歯相、二十三・歯斉相、二十四・四牙鮮白相、二十五・師子王頰相、二十六・常得上味相、二十七・広長舌相、二十八・梵音深遠相、二十九・真青眼相、三十・牛眼睫相、三十一・頂上肉髻相、三十二・眉間白毫相。

木絵二像開眼之事（四六八ページ）　仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり……木画の二像の仏の前に経を置けば三十二相具足するなり。

【阿羅漢】

小乗教を修行して獲得する最高の悟り、声聞の四種の聖果（須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢）の最高位。この位は三界における見惑・思惑を断じ尽くして、涅槃真空の理を実証し、三界に再び生まれてくる素因を離れているが、なお前世の因により酬われた現在の一期の果報身を余すがゆえに有余涅槃という。この生が尽きれば無余涅槃にはいり、再び三界に生まれることはない。

また学ぶべきことがないゆえに無学と名づけ、見思を断尽するゆえに殺賊といい、極果に住して人天の供養に応ずる身なるがゆえに応供といい、この生が尽きると無余涅槃に入り、再び三界に生ずることがないゆえに不生と名づけられる。

しかし二乗ゆえに利己主義者である。

転じて指導者、仏法の修行者という意味に使われることもある。

【戒定慧】

戒とは戒学ともいい、戒律のことである。梵語では尸羅といい、禁戒すなわち「能く仏道を行ずる者の身口意の三業の悪を止め非を防ぐ」の義である。

依義判文抄（富要三巻一一三ページ）にいわく「凡そ戒は防止を以て義と為す、非を防ぐが故に淳なり、悪を止むるが故に善なり」と。

戒を堤に譬え、戒堤ともいわれる。三業の水をせき止めて、非悪にいたらしめるがゆえである。また賊を捕うるに譬える。悪業をほしいままにせぬゆえである。

定とは、定学ともいい、禅定のことである。静慮の義で、仏道を行ずる者に対して「能く慮を息め縁を静めて、心を散乱させぬようにして、法性、仏性を見得し、涅槃の道を悟らせる」ための修行である。

戒堤に対し、定水とも称せられ、この禅定のなかに正しき智慧を生じさせるのである。したがって、煩悩を断つ智慧を生じさせるがゆえに、煩悩を賊に譬え、煩悩の賊の動乱をおさえるを定というのである。

所詮は、戒がもととなって定を得る、定には定禅・無漏禅等がある。

慧とは、慧学ともいい、智慧のことである。仏道を修行する者に対して「能く煩悩惑障を断破して、真理の本性を顕発し、証得せしむる」の義である。

慧を天月に譬え、定水に映る池月ともいわれる。自他を照らして明了ならしめるがゆえである。智慧は煩悩

を断ち、惑障を破するがゆえに、賊を斬るに譬えられる。羅什三蔵のような人は、この慧に勝れた人といわれる。

小乗教の戒定慧について、一代聖教大意（三九〇ページ）にいわく「三蔵とは一には経蔵亦云定蔵二には律蔵亦云戒蔵三には論蔵亦云慧蔵なり但し経律論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云う事あるなり」と。

三蔵とは阿含経であり、小乗教である。三蔵教の経は定、律は戒、論は慧、戒定慧の三学は経律論となる。修行の次第に約せば戒定慧、もし説法の次第に約せば定戒慧、もし法門の次第に約せば慧定戒、あるいは定慧戒、あるいは慧戒定等円のように、始めも終わりもなく、三学は相互に相関連をもつものである。

一代聖教大意（三九〇ページ）に「戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり・定蔵とは味禅定名・浄禅・無漏禅なり・慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり」と小乗教における戒定慧の三学を説かれている。

この戒定慧の三学の勝劣の関係については、

一代聖教大意（三九〇ページ）　戒定慧の勝劣と云うは但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり、但し上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依って上の戒を具するなり、此の定の内に味禅・浄禅は三界の内・色無色界へ生ず無漏禅は声聞・縁覚と成って見思を断じ尽し灰身滅智するなり、慧は又苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば上の戒・定を自然に具足して声聞・縁覚とも成るなり、故に戒より定は勝れ定より慧は勝れたり、而れども此の三蔵教の意は戒が本体にてあるなり、されば阿含経を総結する遺教経には戒を説けるなり。

所詮、阿含小乗教においては、戒定慧の三学を論ずるといえども、戒律が主体となっていることを明かされ

ている。

大乗教の戒定慧については、

一代聖教大意（三九三ページ）次に通教とは大乗の始なり又戒定慧の三学あり。

さらに、一代聖教大意（三九四ページ）にいわく、

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞縁覚を雑えず、菩薩戒とは三聚浄戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華厳の十戒・涅槃経の自行の五支戒・護佗の十戒・大論の十戒・是等は皆菩薩の三聚浄戒の内・摂律儀戒なり、摂善法戒とは八万四千の法門を摂す、饒益有情戒とは四弘誓願なり定とは観練熏修の四種の禅定なり慧とは心生十界の法門なり……此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の蔵通二教に似ず尽未来際の戒・金剛宝戒なり。

同じく、一代聖教大意（三九六ページ）次に円教とは此の円教に二有り一には爾前の円・二には法華・涅槃の円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり云云。

大乗戒には、諸大乗教を通じて三聚浄戒（摂律儀戒・摂衆生戒・不殺生戒）があり、また十重禁戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒・不説四衆過罪戒・不自讃毀他戒・不慳貪戒・不瞋恚戒・不謗三宝戒）があると説かれている。

御義口伝上（七一九ページ）文句の四に云く「於戒有欠漏とは律義失有るをば欠と名け定共道共失あるをば漏と名く」と。

律儀戒とは、仏が大律条儀則を設けて抑止した戒であり、定共戒とは静慮戒とも釈し、三種戒の一つで、修

定の中に自然防非止悪の徳ある戒で、よく色無色に生まれる戒であり、道共戒とは無漏律儀とも釈し、三種戒の一つで、修行の結果、見惑断の無漏見道の智慧に自ら具する防非止悪の徳ある戒で、しぜんに備わる戒である。

以上述べた戒定慧の三学は、釈尊の脱益仏法における三学であって、末法下種仏法の戒定慧の三学とはならないのである。

四信五品抄（三四〇ページ）問うて云く末代初心の行者何物をか制止するや、答えて曰く檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華経と称せしむるを一念信解初随喜の気分と為すなり是れ則ち此の経の本意なり。

末法の初心の者の仏道修行は布施、持戒等の五波羅蜜の修行をしてはならない、南無妙法蓮華経と唱えることが法華経の根本意であると。すなわち五戒、十戒、二百五十戒というような戒律、たとえば、生物を殺すな、ウソをつくなというような戒律をたもつことは、仏道修行の根本ではないのであって、これを止められているのである。

四信五品抄（三四一ページ）教大師末来を誡めて云く「末法の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰か信ず可き」云云。

伝教大師の言を引いて末法無戒をお説きになられているのである。

しかし、無戒だから題目さえ唱えていれば、盗み、殺生をしてもよいということではない。一切の戒律は皆、南無妙法蓮華経の修行に含まれるのである。これは題目を唱えて折伏を行じている者の日々の行動を振り返ってみるならば、自然に智慧、精進、忍辱、持戒、布施、禅定等の徳がそなわっていることは明らかであ

る。無量義経に「六波羅蜜自然在前」とあるのはこのことをいうのである。

しからば、日蓮大聖人の仏法における戒定慧の三学はどうであろうか。

御義口伝下（七六〇ページ）第廿五建立御本尊等の事。御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり。

いわゆる、戒定慧の三学は日蓮大聖人の仏法においては三大秘法となると説かれている。すなわち、釈尊の仏法においては戒定慧の三学をもってその特質となしたが、日蓮大聖人の仏法では定を御本尊としてご建立になり、戒は戒壇、慧は題目の三大秘法となるのである。

このことは、次の御抄を拝するならば明らかである。

上行所伝三大秘法口訣（富要一巻四五ページ）一には本門寿量の大戒、虚空不動戒を無作の円戒と名づけ本門寿量の大戒壇と名づく、二には本門寿量の本尊、虚空不動定、本門無作の大定を本門無作事の一念三千と名づく、三には本門寿量の妙法蓮華経、虚空不動慧を自受用本分の無作の円慧と名づく。

観心本尊抄（二四六ページ）釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

教行証御書（一二八二ページ）此の法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字と為せり。

上行所伝三大秘法口訣裏書き（富要一巻四七ページ）受持即受戒なり、経に云く是を持戒と名づく。

末法のわれら衆生が持つべき唯一絶対の戒は、以上の文において明らかである。

しかるに、日蓮大聖人滅後、五老僧の内の一人である日昭は、叡山の戒壇を踏むことを主張し、他の四老僧と意見が二途に分かれ論争したのである。

五人所破抄（一六一五ページ）　又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否・行住四威儀の所作・平嶮の時機に随い持破に凡聖有り、爾前迹門の尸羅を論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。但し本門の戒躰・委細の経釈・面を以て決す可し云云。

所詮、末法におけるわれわれの戒は、次の御書を拝すれば明らかである。

大学三郎殿御書（一二〇五ページ）　設い世間の諸戒之を破る者なりとも堅く大小・権実等の経を弁えば世間の破戒は仏法の持戒なり。

ゆえに、大御本尊建立の後にあっては、堅く御本尊を受持し、誤った宗教や、その教義を破折するのが第一の持戒であり、世間の戒、釈迦仏法の戒等はまったく無用であるのみか、かえって害毒となるのである。

教行証御書（一二八二ページ）　此の五字の内に豈万戒の功徳を納めざらんや、但し此の具足の妙戒は一度持って後・行者破らんとすれど破れず是を金剛宝器戒とや申しけんなんど立つ可し、三世の諸仏は此の戒を持って法身・報身・応身なんど何れも無始無終の仏に成らせ給ふ。

日蓮大聖人の戒は、金剛宝器戒といい、釈迦仏法における戒律の修行ではなく、ひとたび御本尊を受持したら、たとえ退転したとしても御本尊とは離れられないという戒である。末法今時の三学は、金剛不動戒、金剛不動定、金剛不動慧である。

釈尊の法華経では、色香美味と説き、天台はこれを戒定慧に釈し、日蓮大聖人の仏法では三大秘法に釈する

のである。したがって、御本尊を拝んでいること自体が戒定慧の三学を修していることになる。

四信五品抄（三三九ページ）問う末法に入って初心の行者必ず円の三学を具するや不や、答えて曰く此の義大事たる故に経文を勘え出して貴辺に送付す、所謂五品の初二三品には仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る慧又堪ざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因・信は慧の因・名字即の位なり。

末法凡愚の衆生には、南無妙法蓮華経の境涯をすぐつかむほどの智慧がない。したがって御本尊を信ずる、その「信」の一字をもって智慧に代えるのだと仰せられている。

すなわち「以信代慧」の信心が根本であるとお説きになられている。

【五逆罪】

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身より血を出す、和合僧を破すの五罪を五逆罪といい、無間地獄に落ちるとされている。五無間業ともいう。（聖愚問答抄四七七ページ）

阿羅漢とは、声聞の四果のうち、最上の阿羅漢果を得たもので、「阿羅漢を殺す」とは現在では立派な指導者や仏法を修行する者を殺すこと。「仏身より血を出す」とは仏の身を傷つけることをいう。すなわち釈尊は九横の大難のなかに足の指より血を出されたことがあり、日蓮大聖人は小松原の法難において、ひたいに傷をうけられた。このような危害を加えた者が、この逆罪を犯したことになる。「和合僧を破す」とは仏道修行に

励んでいる僧侶の集団を破壊することである。この場合の僧とは僧侶に限定されたものではなく、正法修行者の団体をさす。現在、創価学会が信心修行に励んでいるなかにあって、その和合僧の組織を乱し、あるいは修行の妨げとなる者等は当然これにあたるのである。

以上が通途の五逆罪であって、経によっては別に立てているものもある。

【三災七難】

三災とは、大の三災、小の三災があり、大は壊劫の時に起きる火災・風災・水災である。小は穀貴・兵革・疫病の三つである。

穀貴　五穀の価が高いこと、すなわち物価騰貴。

兵革　兵は剣等の武器、革は甲冑の意味で、戦争のこと。

疫病　伝染病、流行病がはやること。肉体の病ばかりでなく精神分裂症、ノイローゼ、思想の混乱なども疫病の一つである。

七難は経文により多少の差異はあるが、いま薬師経の七難をあげれば、

人衆疾疫の難　伝染病、流行病等がはやり多くの人が死ぬ難。

他国侵逼の難　他国から侵略される難。

自界叛逆の難　仲間同士の争い、同士打ちをいう。

星宿変怪の難　星等の天体の運行に異変があったり、彗星が現われたりすること。
日月薄蝕の難　日蝕・月蝕をいう。
非時風雨の難　季節はずれの暴風や強風。
過時不雨の難　雨期にはいってもなお雨が降らない天候の異変。

国にこうした三災七難の競い起こる原因については次に明らかである。

仁王経　若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん。

大集経　若し国王有って無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く滅失して其の国当に三の不祥の事有るべし、一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。

立正安国論（一七ページ）　世皆正に背き人悉く悪に帰す、故に善神は国を捨てて相去り聖人は所を辞して還りたまわず、是れを以て魔来り鬼来り災起り難起る言わずんばある可からず恐れずんばある可からず。

すなわち、一国の民衆が正法を信ぜず、誤れる法を信ずるゆえに三災七難が競い起こるのである。これらの災難から国を救う方途について、立正安国論にさらに次のように仰せられている。

如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。（二四ページ）

唯須く凶を捨てて善に帰し源を塞ぎ根を截べし。（二五ページ）

謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば国中安穏にして天下泰平ならん。（二七ページ）

早く天下の静謐を思わば須く国中の謗法を断つべし。（三〇ページ）

夫れ釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍の以後経説は則ち其の施を止む、然れば則ち四海万邦一切の四衆其の悪に施さず皆此の善に帰せば何なる難か並び起り何なる災か競い来らん。（三〇ページ）

すなわち、広宣流布こそ三災七難を根本から止め、平和楽土建設の直道なのである。

現在では日蓮大聖人ご在世当時と比較して七難の出かたが逆次に出ている。（池田大作著「立正安国論講義」一〇三ページ参照のこと）

【五濁】

法華経方便品第二　舎利弗、諸仏は五濁の悪世に出でたもう。所謂劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁なり。

まず、劫濁とは時代の濁りである。飢饉・疫病・戦争等が起こって、時代そのものが乱れること。

時代によって、混乱した、濁りきった時代もあり、比較的平和な時代もある。時代の濁りといっても、実体というものはないが、他の四濁が激しく盛んであり、その濁りが、長くつづいている場合、劫濁という。劫とは長時という意味でこれは相対的なものである。

したがって、ある一年間の乱れを劫濁ともいえるし、五年、十年、また百年、二百年の乱れも劫濁といえる。

次に、衆生濁とは、社会全体の濁りであり、別に本体があるわけではない。

しかし、現在の社会をみたときに、いかに濁りきっているかがわかるのである。悪徳政治家たちは、既成の

権威にしがみつき、私利私欲にあけくれている。
こうした政治家を生むのも、結局、民衆の無気力、無知、そして長いものにまかれろ式の封建性が原因しているのである。
このような社会全体の濁りが衆生濁である。
以上の二つの濁りは、全体の濁りであり、総合的にみたうえでの濁りである。次にあげる煩悩濁、見濁、命濁は、いずれも個人個人についていえるものである。
煩悩濁は、五鈍使、すなわち、貪、瞋、癡、慢、疑という、むしろ本能的な迷いである。
自分の利益ばかりをむさぼるように求めて、他人をかえりみないのは「貪」である。
事態を冷静に判断できず、すぐに感情に走り、生活を破壊するのは「瞋」である。
目先のことのみにとらわれ、自分の一生を台無しにするのは「癡」である。
少々のことを鼻にかけ、正しいものを受け入れようとしないのは「慢」である。
なんでも疑いの目を向け自暴自棄になるのは「疑」である。
次に見濁とは、思想の濁りである。
先の五鈍使が生命それ自体にそなわった、いわば誰にでもある本能的な濁りであるのに対し、五利使という才智ある邪見、煩悩で、識者の思想的な迷いである。
次に、命濁とは、生命それ自体の濁りである。
すなわち、煩悩濁や見濁が原因で、生命それ自体が濁り、生命力が弱まり、意欲がなくなっていることをい

うのである。

御義口伝上（七一七ページ）　日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穏なれば劫濁に非ず・実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩悩即菩提生死即涅槃の妙旨なれば煩悩濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり、正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮南無妙法蓮華経を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり……法華経不信の者を以て五濁障重の者とす。

【劣応身・勝応身】

応身とは境（法身）智（報身）一如の身（これを真身という）より、衆生を救うために衆生の機根にしたがって応現する仏身をいう。

劣応身とは初地以前の凡夫二乗に対して応現する仏身、すなわち八相成道の仏身で、三身中の応身である。一丈六尺の仏身であり、老比丘の相をしている仏をいう。小乗三蔵教の仏で、四土のなかには凡聖同居土に住む。

勝応身とは、法報応の三身中の報身に自受用と他受用があり、その他受用の報身を応身と名づけ、劣応身に対して勝と名づける。

初地以上の菩薩に対して応現する仏身であり、大乗の初門たる通教の仏である。四土のなかには方便有余土に住んでいる。

【劫】

仏法上、時間を示す単位として「劫」が用いられる。劫の分類については、経論により多種多説であるが、大別して小劫・中劫・大劫の三種の劫があり、また中間劫に減劫・増劫・増減劫があり、倶舎論においては成・住・壊・空の四劫が説かれている。

また小・中・大劫といっても、同じ梵語を経論によって、あるときは小劫と訳し、あるときは中劫と訳すなどまちまちであるが、一般的には次のようである。

小劫とは住劫の初め、人寿無量歳より百年に一歳を減じつつ、ついに人寿十歳にいたる。これを第一減劫とする。次に人寿十歳より百年に一歳を増して人寿八万歳にいたる。また八万歳より百年に一歳を減じて人寿十歳にいたる。これを第二の増減劫とする。以下第十九にいたるまで、このように増減すること十八回、最後に人寿十歳より百年に一歳を増して無量歳にいたる、これを第二十の増劫とする。第一はただ一減、第二十はただ一増であるけれども、その時節の長さは各中間の一増減に等しい。この一増減の時節を一小劫と名づける。したがって一小劫は千六百万年より二千年を減じた数にあたる。（人寿八万歳より、百年に一歳を減じて人寿零歳にいたり、さらに零歳より百年に一歳を増して八万歳にいたるとすれば千六百万年となるが、実際には十歳以下にはならないで千六百万年より二千年を減じた長さが一小劫となる）

中劫とは、以上のように住劫の一減より中間十八の増減、第二十の一増にいたる、この二十増減の時節を合

わせて中劫とする。すなわち一中劫は二十小劫にあたる。（顕謗法抄四四七ページ参照）

大劫とは四中劫をいい、四中劫とは、成・住・壊・空をいう。一つの世界が成立するまでの期間を成劫、成立以後衆生の住んでいる期間を住劫、火災・風災・水災等の三災によって、それが壊れる期間を壊劫、消滅して空となる期間を空劫という。そして空劫が過ぎればまた成劫がはじまり、この成・住・壊・空の四劫が循環して尽きることがないと説かれている。

増、減、増減劫の三種の劫は、住劫二十小劫中の差別を示すもので、住劫のなかで、初めの第一劫は減劫、最後の第二十劫は増劫、中間の十八劫は増減劫になるのであり、合して二十増減して住劫を終わり壊劫にはいるのである。

このように住劫に二十小劫があると共に、壊劫、空劫、成劫にもおのおの二十小劫ある。ただしこの三劫には増減の別はない。前述のように、この成住壊空の四劫を総括して一大劫（四中劫）といい、これが一つの生命体の初めから終わるまでの時間である。

しかし末法において大御本尊を信ずる者は、未来永劫にいたるまで、飢饉・疫病・刀兵の三災や、住劫の終わりに起こる火・風・水の三災にもおびやかされることのない、また成住壊空の変化にも影響されない絶対の幸福をつかむことができることを、日蓮大聖人は次のように仰せられている。

観心本尊抄（二四七ページ）今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足・三種の世間なり。

【十羅刹女】

十羅刹女は法華以前には悪鬼であったが、法華以後においては善鬼となり、法華経を護持する者、すなわち御本尊を受持する者を守護する。

法華経陀羅尼品第二十六　爾の時に羅刹女等有り、一を藍婆と名づけ、二を毗藍婆と名づけ、三を曲歯と名づけ、四を華歯と名づけ、五を黒歯と名づけ、六を多髪と名づけ、七を無厭足と名づけ、八を持瓔珞と名づけ、九を皐諦と名づけ、十を奪一切衆生精気と名づく。是の十羅刹女、鬼子母、並びに其の子、及び眷属と俱に仏所に詣でて、同声に仏に白して言さく、世尊、我等亦、法華経を読誦し受持せん者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す。若し、法師の短を伺い求むる者有りとも、便を得ざらしめん。

この文の後に十九句の呪を説く。さらに「若し我が呪に順ぜずして、説法者を悩乱せば、頭破れて七分に作ること、阿梨樹の枝の如くならん」と説き、自らもまた法華の行者を擁護せんと誓う。仏これを印可し、特に皐諦女の名をあげ、法師の擁護を命じた。御書には次のようにある。

爾前二乗菩薩不作仏事（四二六ページ）　十羅刹女も仏道を悟り云云。

日女御前御返事（一二四六ページ）　十羅刹女と申すは十人の大鬼神女・四天下の一切の鬼神の母なり……此の十羅刹女は上品の鬼神として精気を食す疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり・一には善鬼・二には悪鬼なり、善鬼は法華経の怨を食す・悪鬼は法華経の行者を食す。

経王殿御返事（一一二四ページ）　鬼子母神・十羅刹女・法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり……十羅刹女の中にも皐諦女の守護ふかかるべきなり。

報恩抄（三二三ページ）　但一の冥加には景信と円智・実成とが・さきにゆきしこそ一のたすかりとは・をもへども彼等は法華経十羅刹女のせめを・かほりて・はやく失ぬ。

【声聞の十大弟子】

摩訶迦葉　摩訶とは大という意味で、尼倶利陀長者という大金持ちの子として生まれながら、一切の財産や煩悩を捨てて、乞食行などの難行苦行に徹して頭陀第一となる。仏滅後は付法蔵の第一として二十年の間、小乗教を弘めた。

舎利弗　舎利弗は梵語、身子と訳す。方便品の対告衆。仏の説法の真意をよく理解したので智慧第一といわれた。法華経譬喩品において華光如来の記別を与えられた。（開目抄上一九一ページ・二三二ページ）

大目犍連　目連ともいい神通第一とうたわれた。しかしその神通力で、餓鬼道に落ちた母親を救えなかったという話は有名。（盂蘭盆御書一四二七ページ）

摩訶迦旃延　論議第一といわれ、よく布教に努めた。

阿㝹楼駄　阿那律ともいわれ天眼第一、三千世界のすべてを見通す天眼通に秀でていた。誕生のとき、母の胎内からご飯のはいった鉢をもって出て、一生涯、衣食に恵まれたという。（時光御返事一五四九ページ）

富楼那　富楼那弥多羅尼子ともいう。説法第一といわれ、仏の教えをよくわきまえ、ひろく説法した。

須菩提　解空第一、思索にすぐれ、よく諸法の真理を悟ったといわれる。

阿難　阿難陀ともいう。釈尊の従弟で、仏に常随給仕して一代聖教すべてに通達して多聞第一といわれた。釈尊滅後は付法蔵の第二として活躍した。

羅睺羅　釈尊が出家する前の息子、密行第一といわれた。

優婆離　持戒第一といわれ、戒律を持つことに秀でていた。

【釈尊の九横の大難】

釈尊が在世中に受けた九つの大難である。御書に列挙された九難を解説する。

（一）孫陀梨の謗　釈尊が孫陀梨に謗られた。釈尊が過去世に浄眼といったとき、いまの孫陀梨である婬女鹿相を殺し、辟支仏にその罪を転嫁した因縁で謗じられるのであるという。

（二）金鏘またはバラモン城の漿　釈尊が阿難を連れてバラモン城を乞食し、食物が得られずに空鉢であったとき、年老いた下婢が、供養する物がなくて、捨てようとしたくさい潘淀を供養した。バラモンがこの臭食の報いを謗った。

（三）阿耆多王の馬麦　バラモン種の豪族小王である阿耆多王が釈尊および五百の僧に来国を請い、王は遊楽にふけって供養を忘れ、一行を餓死せしめようとして九十日の間、馬に食わせる麦を与えた。

（四）瑠璃の殺釈　すなわち無量の釈子が波瑠璃王に殺されたこと。波瑠璃は仏在世の舎衛国の王であり、父の波斯匿王が欺かれて釈迦族の卑賤な婢と結婚したのをうらんで、即位の後、釈迦族を全滅させたという。しかし釈尊の予言のとおり、七日目に焼死して無間地獄に落ちたという。

（五）乞食空鉢　釈尊が阿難を連れバラモン城にはいろうとしたとき、王は民衆が釈尊に帰依するのをねたんで、布施し法を聴く者に罰金を課して制止したので、衆人は皆、耳を閉じてしまい、供養する者もなく、空鉢であったという。

（六）旃遮女の謗、または旃遮バラモン女が鉢を腹にふせし　バラモンの旃遮女が腹に鉢を入れて釈尊のところにきて、釈尊の子であると誹謗した。そのとき、帝釈がネズミに変化して、衣の裏の鉢をつないでいるヒモを嚙み切ったため、鉢が地に落ちたので衆人は皆歓喜したという。また旃遮女はこのため地が裂けて無間地獄に落ちたという。

（七）調達が山を推す、また提婆が大石をとばせし　提婆達多が釈尊を怨んで殺そうとし、耆闍崛山で岩石を持ちあげて釈迦の頭めがけてなげうった。山神金ぴらは釈迦を守るため手で石を受けとめたが、小片が散って釈尊の足の親指を破って血を出したという。

（八）寒風に衣を索む　冬至前後の八夜に寒風が吹きすさんで竹を破ったという。そのとき釈尊は三衣を索めて寒さを防いだという。

（九）阿闍世王の酔象を放ちし　阿闍世王が提婆達多にそそのかされ、父王を幽閉して新王となり、さらに釈尊を殺して提婆を立てようとし、悪象に酒を飲ませて放ち、釈尊を踏み殺そうとした。